The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<書評>羽生清著『装うこと生きること女性たちの近代』
Author(s)	横川, 公子
Citation	デザイン理論. 2004, 45, p. 90-93
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53110
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

羽生　清著
『装うこと生きること ── 女性たちの近代 ──』

勁草書房　2004年　239ページ

横川公子／武庫川女子大学

1．はじめに

「装いは生きることそのものを映す鏡である（セシル・ビートン）」「衣服は生きる身体そのものである（鷲田清一）」ということは，多かれ少なかれ服飾研究者の言及するところであり，また服飾と人間の関係を考えるときの有効な視座であり，拠り所とされてきた。

「生きること」と「装うこと」が重なるのは，そのどちらもが本来的に「リアルタイム」の出来事であり，机上の学問的な理論を貫くものに与しがたく，またそのような理論から理解が与えられるものでもないからである。そうであるからこそ，生き方にのっぴきならぬ試行錯誤があるように，装いにも取捨選択がある。しかも両者は，必然的にぴったり寄り添っているわけでもなさそうである。装いは，まぎれもなく日常的な思考に与する行為であり，それだけに机上の学問的な検討が，現実をすり抜けていってしまう危険を常にはらんでいる。「装うこと」と「生きること」とを貫く「理」がどのようなことなのか，このことは，服飾論を貫く第一の課題だろう。

本書は，明治の開国以降の日本で先端的な生き方をした女性たちに焦点を当てる。そこに，このことを考えるに足る「有効な手本」を見いだそうとされたのだ。本書が先端的な生き方をする女性たちに焦点を当てたのは，そのいずれもが，文芸という生きることに迫ろうとする世界とつながる存在であったことにあるだろう。文芸は，文明開化を目指す日本と日本人の葛藤を，先端的な生き方をした女性たちの生き様に凝縮させて映し出して見せた。女性たちの生き様は，「国と家からの開放を試みた女たち」（‘はじめに’参照）のものだった。一方装いは，古代から言葉とともに語られることでドラマを紡ぎ出してきた。「言説」を通して「生きること」が語られ，「生きること」が託された「装い」がドラマを紡ぎ出す。「言説」も「装い」も，共に「生きること」の証し，表現なのだ。このことに注目した本書の着想は明快である。その前提に，著者には一つの仮説としての問題意識があった。古来，恋の作法のなかで語られた装いは言葉と分かちがたく，かみ合っていた。ところが装いが和服から身につかぬ洋服へと促され，富国強兵政策が正当化され，封建制度が一面において強化された明治時代には，新しい言葉と装いがうまくかみ合わなくなったという。新しい時代において新しい言葉と新しい装いが，ともに試行錯誤と葛藤を呈し始めたのだとする。だから先端的な女性たちの生き方には，新しい言葉と新しい装いの両方を，余儀なく選び取っていった軌跡が辿れるにちがいないというのである。

「生きること」と「装うこと」はどうかみ合うのか。服飾論の立場から見れば，「装うこと」から独自に真実をすくい取るという視座は基本的・原則的なものである。‘はじめに’の結びで，「言説を裏切って服装が語る真実があるかもしれない」という羽生さんの期待は，服飾研究者としての評者の注意を喚起し，申し分なく惹きつけるものである。

2．時代を先導した生き方への注目

本書は，先端的な女性の生き方と装い方をした5人の人物を，5つの章立てで取り上げ

る。津田梅子，樋口一葉，与謝野晶子，平塚雷鳥，林芙美子である。周知のように津田梅子は近代女子教育の先達であり，他の4人は，それぞれ出自を異にする独自の視点からその思想を表現しえた，優れた文筆家たちである。むろん雷鳥は，女性の地位向上のための運動を展開した先覚者といえる人物でもある。本書でも，これらの側面に焦点が当てられる。彼女たちの作品からだけでなく，同時代の文芸や評論のなかで，彼女たちの姿を取材する作品や先行研究を縦横無尽に掘り起こして活用する。当事者の内部と外部から迫って描かき出された，生きる姿には説得力があり，目を見張るものがある。それらは，精力的な文献の渉猟とその広汎な活用の成果としても，また文学研究としても感服に値すると思う。そして，さらに，これらの女性たちが，どのように装うたのかが描き出されるのである。近代服装史のなかではあまり注目されなかった事実も発掘されている。

その一つは，米国で教育を受けた津田梅子の着衣で，梅子の書簡を参照することによって再現されている。梅子は，日本の上流階級の女性が洋装を四苦八苦して着ているのを快く思わず，自身は不慣れであった和服を，まるで現代のわれわれが和装に挑戦するように着た。「アメリカで育ち女性の意識改革を提唱する梅子が衣服改革の煩瑣や出費を回避して着物を着，伝統を遵守するはずの後宮女性たちが率先して洋装を試み」(16頁) たのだ。この矛盾は，世相を描くことによって時代の展望を見いだそうとした往時の小説に視野を拡大することで，さらに問いかけられる。一部を紹介すると，徳富蘆花の『不如帰』，芥川龍之介の『舞踏会』，ピエール・ロティの『秋の日本』，三島由紀夫『鹿鳴館』，さらに二葉亭四迷の『浮雲』や田邊花圃の『藪の鶯』，そして津田梅子と同時代の下田歌子に関する評論をも参照して，女性たちの「生きること」と「装うこと」のからまりと乖離を見せてくれる。こうした浩瀚な資料の読破にもとづく参照は，全章にわたるもので，著者による並はずれた達成に頭が下がる。

本書の言及は，「生きること」も「装うこと」も理屈ではないということに即したものであろうか，決して理にこだわったものではない。多面的な引用と参照によって，その様態を描き尽くすことで小気味のよい結論づけに到達している。そのためであろうか，服飾論として「装いが語る真実」が充分に展開されているかという点になると，やや余地があるようにおもう。現段階における著者の意図されるところは，「生きること」と「装うこと」の矛盾や乖離，そして混迷する人間の姿に突き動かされて，「生きること」の意味をまず探ることにあったのではなかろうか。にもかかわらず「生きること」への言及は，「装うこと」への想像を雄弁にかき立ててくれるのだが。

ここには，文芸資料を介した服飾論探求における陥落が見え隠れしている。服飾研究者としての自戒を込めての評者の感想である。

3．的を射る装いへの言及

夏目漱石は，『我輩は猫である』の中で「猫」にかなり長文に及ぶ服飾論をぶち上げさせている。それは，外観にすぎない服装に翻弄され，にもかかわらず装うことでしか生きられない人間の矮小さを看破した，「猫」による装いと人間についての開陳である。漱石の装いへのこだわりは，その作品に如実に反映している。

本書では，『三四郎』に登場する美禰子の装いの場合が取り上げられる。美禰子は，名取春山の挿絵にも描かれるが，地味な服装や季節はずれのリボンで象徴され，それは当時

の若い女性の服装規範からはずれたものだった。美禰子のモデル，平塚雷鳥（らいてう）の実際の装いに近い姿は，森田草平が『煤煙』の中で描いた「目に立たぬ程の縞の袴を穿いた女学生らしい」朋子のそれである。〈らいてう〉は，朋子や美禰子のモデルであるが，実際に学校を卒業してからも身につけていたモスリンの地味な縦縞の袴と，その断髪は，充分に人目を引くものだった。漱石は，〈らいてう〉という，時代とかけ離れた女性に興味を覚えた。本書で指摘されるように，漱石の『三四郎』後の作品に登場する女性たちの人物造形は，〈らいてう〉の生き方や存在とその後もずうっと切り離せないのかもしれない。漱石は，「リアルタイム」の〈らいてう〉の着衣にとどまらず，一般とは異なる美禰子の人物造形を着衣の記述によって完成させている。

このような〈らいてう〉の装いへの言及は，資料の豊富さもあって，本書のなかでもっとも詳細で生き生きしている。本名平塚明子は，明治の官吏の娘であった。洋行帰りの高級官吏の家庭に育った明子は，国民国家形成の展望と政策に対応した時代の先端をいく装いで育った。その服装は，子供時代の洋装にはじまり，女学生時代は筒袖の上衣に袴という改良服の女学生スタイルで，袴はそのまま卒業後も続けられた。当時の若い女性は，学校を卒業すると袴を脱ぎ，帯つきの着流しになるのが普通だったのだが。さらに結婚し，雑誌『青鞜』を創刊した頃の明子は，断髪して青サージのワンピースという洋装になってしまう。モダンガールとは一線を画する合理主義的な考え方によるものだった。一般の規範からはかけ離れた〈らいてう〉の着衣について，森田草平に「故意とらしくて，不自然じゃありませんか。」と問いかけられ，「えゝ不自然なんです，私が不自然なんですもの。」と応えたという。〈らいてう〉自身が，全く同じ場面を小説『峠』のなかでも再現している。このエピソードは，漱石が「猫」に服飾論をぶたせたことに充分に値する。

本書は，こうした急所ともいうべき装いの事実を，〈らいてう〉の生きる姿と共に教えてくれる。

ところで「装いが語る真実」とは何であろうか。〈らいてう〉の装いの不自然さは，〈らいてう〉の生き方の普通とは異なる在り方に対応している。しかし「装うこと」の真実は，この点のみに留まらないのではないか。〈らいてう〉が着たモスリンの縞の袴は，明治初年代に学制が制定されて女子が学校に行くようになったとき，太政官によって正式に認められた小倉織や仙台平の縞の男袴を着用したことを想起させる。それらは，女性が男性と同様な教育を受けるるために要請された装いだった。〈らいてう〉が身につけた縞の袴が襠のある男袴であったのか，それとも後に普及した女学生用の行灯袴であったのか。素材がモスリンということも，当時既に男袴には見られたが，新しい女を特徴づける装いなのかどうか。これらの点について検討をすることが，装いを価値付けする上で見逃せない。言説が示唆するコンテクストとは別に，装いを支える物的な条件が「装いが語る真実」として見逃せない。

4．おわりに

「装いが語る真実」，言い換えれば「装うこと」の価値づけは，如何にして可能となるのか。本書を通して考えさせられた，評者にとっての課題でもある。

大雑把な言い方だが，取り上げられた5人の共通項は，彼女たちがいずれも言説において生きた人物だということだ。このことが5人における「装うこと」と「生きること」の

基盤を貫いているのだ。だとすれば，小説や評論などの言説の発掘に加えて，そこで言及された「装うこと」自体の指し示すもの（＝価値づけ）が，モノや言説を通して語りとして捉え直される余地がある。

この点に関する本書の成果は，モノとしての衣服や装い自体に対する分析をすることなしに，到達しうる「装うこと」の価値付けを，徹底して試みたということではないだろうか。この実験的な取り組みは，上述のようなモノとして装いの分析と合体するとき，さらに有効に「装いが語る真実」を導き出すに違いない。著者はすでに，次へのステップを踏み出しておられるにちがいない。